

筑波大学と地中海学

秋山 学

文芸・言語学系講師

1. はじめに

編集委員の方から、「地中海学会ヘレンド賞」の受賞に関連して何か記事を、との依頼があった。この春、拙著『教父と古典解釈—予型論の射程—』を創文社から公刊し、それが幸いにも学会賞を受けたのである。記事の執筆を機会にと思い、『筑波フォーラム』の前号・前々号などを改めて読み返してみた。その中で我が意を得たりと思ったのは、第59号に掲載された町田助教授（生物科学系）による「総合大学としてのバランス」である。氏は、生物科学界にあってもかつては第二・第三外国語としてドイツ語・フランス語をマスターするのが慣例であったのに、近年「英語必修」との観念に縛られて語学のノルマを減らした結果、英語を含めて学生の総合的な外国語力低下が深刻となり、その結果「クラシカル」な学問領域が成立しにくくなったことを嘆いておられる。

わたくしの専門は「西洋古典学・地中海学」である。西洋古典学の恩師K教授（日本学士院会員）は「この学界では、近代語を最低四つは完璧にこなします」とつねづね語っておられた（英・独・仏・伊をさす）。古典学であるから、このほかさらに専攻対象となる古典ギリシア語・ラテン語が加わる。わたくしの受けた大学院の入試でも、古典語2つ、近代語2つが課せられた。

インターネット全盛の今日、英語教育に力を入れねばならないことは言うまでもなからう。しかしながら、教育カリキュラムを考える上でつねづね思うのは、それがしっかりとした学問論的根拠に根ざしたものなのかどうか問われねばならないということである。英語が必要となるのは、米英の文化が現在の世界文化を牽引している結果であろう。けれども世界史をひもとけば、そのような現代文化の型が成立するまでに、いかに多

くの文化が興亡を経てきたかがわかる。教養ある英米人は、言語活動を含めた自らの存在様態のうちに、言わばヨーロッパ人が経験してきた歴史の重みを担い、その上でこんにち英語を語っているのである。われわれがその現象だけに囚われ、彼らとのコミュニケーションの成立にばかり気を取られていたのでは、相互の内在的な文化理解は成り立たないだろう。

2. 西洋古典学？

このような意識に駆り立てられてであろう、わが国でも戦後の一時期その必要性が盛んに叫ばれたのが「西洋古典学」という分野である。「日本西洋古典学会」（初代会長故田中美知太郎）が一昨年第50回大会を催したこと、東京大学の大学院西洋古典学専修課程の設立が昭和28年（京都大学ではもう少し遡る）であることを考えれば、「西洋古典学」という学問形態が戦後のもので、比較的新しいことが理解されよう。もちろん、西洋古代の哲学・歴史・文学を原典研究により究めようとする動きは、明治期にその端緒を見出す。筑波大学の前身東京教育大学にも、すぐれた古典学関係の教授たちがおられた。ただ「哲・史・文」を一体とした「西洋古典学」という学問は、上述

のような成立状況を持っている。

「西洋古典学」は、西洋文明の揺籃期であるギリシア・ローマ文化を、その原典から包括的に研究しようとする意図に発している。わが国でこの講座が置かれているのは、国公立大学では京大、東大、名古屋大、東京都立大などである（他大学では、前述のような形で哲学・史学講座等に関係者が配属されている）。

ではわが筑波大学はどうか。哲学と倫理学に古代・中世関係の、また歴史学などにも古代・中世担当のポストがある。それを除けば、いちおう総括的な形で「西洋古典学」と称することのできるポストは、現在のところ文芸・言語学系に置かれている。もっとも学生の側から見た場合、学類・大学院を通じて「西洋古典学」関係の授業だけで修了単位を充足することはできない（つまり専修課程がない）ため、筑波大学に狭義の意味で、つまり上記の国公立大と同じような意味で「西洋古典学」が存在する、とは言えない。

3. 筑波大学の特色――オリエント学

ここで「西洋古典学」からひとまず目を放すと、筑波大学には旧教育大学時代から豊かな伝統をもつ学問分野が存在する。それはオリエント学である。故杉勇

教授をはじめとする方々が築かれた学統は、永年にわたる機関研究によるコレクション「オリент資料集成」(中央図書館1F「オリент・コーナー」)にその足跡を留めている。象形・楔形文字板からシリア教父集成までを視野に収めたこの蔵書は、国内でも屈指の水準を誇る(詳しくは『風に響く回想 杉勇教授』中央図書館289-Su32を参照)。そして人文学類には「オリент史」専修課程があり、かなり多くの学生が学んでいる。またわが国には、三笠宮様の御尽力による「日本オリент学会」があつて長い伝統を持つが、筑波大学もその一角を担う重要な研究拠点となっている。

オリент史学において基本資料とされるのは、やはり旧約聖書の歴史書であり、学類の語学カリキュラムでも旧約聖書ヘブル語が必修科目として課されている。そこには、アラビア語やシリア語などのセム系諸言語も、ヘブル語を基本としてマスターが可能だという学問論的配慮が働いている。

筑波大学の図書館では、ギリシア・ラテンの関係書籍もしばしば「オリエン・コーナー」に配架されていることがある。特にわたくしにも親しいミーニュ版「教父学全集」(ギリシア教父162巻、ラテン教父221巻)はこの分類に含まれ

ている。筑波大学では、西洋古典学とオリент学とを併せて「オリент学」と総称されていると解すべきなのかも知れない。ちなみに先の「オリент史」学課程は、人文学類の西洋史学コースに属している。これは一見逆の現象に見えるが、西洋文化がオリент文明にその淵源を有しているという発展史観と、西洋古代を「オリент」と総称する文明史観において、この二つの現象は合致する。

4. 「地中海学」の可能性

それにしても、ギリシア語やラテン語を「オリент諸言語」と呼ぶのはいささか不自然である。特にラテン語を「オリент語」のうちに数えるのは、どう考えても無理がある。ギリシア語・ラテン語は「西洋古典語」、ヘブル語やアラブ語は(言うなれば)「オリент語」とするのが自然であろう。

ところで、日本の現代社会は極めて西洋化されているとは言え、日本人のメンタリティーがもちろん依然として東洋的であることは、誰しもが認めるであろう。これは、日本語が東洋語であるかぎり変わることはあるまい。語学の初級授業で思うことだが、ギリシア語やラテン語に比べてヘブル語のほうが、日本

人には圧倒的に親しみやすい。「シャレ」が決まることもしばしば起こる。文法構造がおおらかであるから、それまで西洋語だけを学び習得してきた者には、不明瞭に思われる表現がたびたび現れる。そこで、多くの人々が口をそろえて「欧米人と競争しても、ヘブル語力なら日本人は負けない」と言う。つまり日本人は精神性・言語感覚の点で、やはりオリエント世界に属すると言える。

もとより古代地中海世界にあって、ギリシア・ラテン世界と東方セム・ハム文化圏とは、それほど没交渉だったわけではない（だからといって先のように全面的に「オリエント」に組み込むには無理がある）。地中海世界を一体として鳥瞰した場合に発見される事象も数多く存在する。かくして、英語を初めとする西洋近代語を根底から理解するために西洋古典を繙いた上で、かつ日本人としてのオリジナリティーを発現する場として東方オリエント世界に立ち返る、という姿勢

が編み出されうるならば、それはある意味で理想的だとは言えないだろうか。

5. おわりに

このような、ギリシア・ローマ世界とオリエント世界の研究を包括しようのような学的領域の名称となりうるのが「地中海学」である。冒頭に危惧した「外国語力の低下」は、学問論の上に立った言わば「システムティックな外国語学」が総合大学において立ち上げられるならば、時間はかかるけれど解消されるものと思われる。そのためには、国際社会に対応しつつ、なお日本人としての特性を活かしうる外国語教育を、この筑波大学において切り開いてゆく必要があろう。その意味で、たとえば「地中海学」という枠組みは、学的にもまた筑波大学に特色ある領域としても、非常に意義深いものとなるように思う。

（あきやままなぶ 西洋古典学）

